

『3.11 避難者の声：当事者自身がアーカイブ』

のテキストマイニング

県外避難者の苦悩と要求に焦点を当てて

木下シエナ サレジオ工業高等専門学校

Shiena Kinoshita (Salesian Polytechnic)

1. 問題	2
1.1 はじめに	2
1.2 研究対象として収集した東日本大震災に関わる避難者の文献	2
2. 目的	2
3. 方法	2
3.1 分析対象：分析の対象とした書籍とその理由	2
3.2 分析方法	3
3.3 倫理的配慮	3
4. 結果と考察	3
4.1 基本情報	3
4.2 単語頻度解析	4
4.3 重要な単語の原文参照	5
(1) 子ども+子どもたち	5
(2) 福島	5
(3) 国	6
(4) 放射能	7
(5) 健康	8
4.4 係り受け頻度解析	9
4.5 ことばネットワーク	9
5. 結論	10
5.1 子を思う母親の現状からみた周囲と社会の問題点	10
5.2 本研究でわかった母子避難家族の母親の心情	11
5.3 子どもの作文と対比した本研究対象の母親の語りの特徴	11
6. おわりに：筆者の個人的体験より	12
7. 謝辞	13
8. 文献	13

1. 問題

1.1 はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、地震と津波、さらに人災ともいえる原発事故をも引き起こした未曾有の震災であった。福島第一原子力発電所で発生した炉心溶融（メルトダウン）など、一連の放射性物質の放出を伴った被害の深刻さは大規模なものとなり、国際原子力事象評価尺度（INES）は最悪のレベル7（深刻な事故）に分類される。また、放射性物質による被害は、原発周辺だけにとどまらず、最終処分するまでの間に保管する中間貯蔵施設・一時保管場所・焼却施設周辺の住民の健康被害が懸念されることも着目すべき点である。

故郷を奪われ、避難せざるを得なかった人も多く、この問題は復興の大きな足枷となっている。「避難者」は、今もなお様々な困難を抱えている。その人たちの声を聞くことは大切である。また避難当事者の体験そのものを文章に綴った語りは、避難者の心境および、避難者が置かれている状況を把握するという点で重要な記録である。

本研究では、震災における避難当事者の体験に着目し、語りを通して分析する。

1.2 研究対象として収集した東日本大震災に関わる避難者の文献

以下の書籍を研究対象とした。東日本大震災避難者の会 Thanks & Dream（編）（2017）『3.11 避難者の声～当事者自身がアーカイブ』東日本大震災避難者の会 Thanks & Dream 発行。本書は、東日本大震災での被災をきっかけに避難を余儀なくされた人びとが書いた避難者の証言を集めたものである。基本的には、それぞれの従来居住地、移住先、誰と避難したか、名前またはペンネームが文章の題になっており、その括りごとに避難に関する体験記がまとめられている。

2. 目的

本研究の目的は、東日本大震災をきっかけに避難経験した人びとの語りから、避難生活に至った理由と生活の現状についての語りの特徴を明らかにすることである。

3. 方法

3.1 分析対象：分析の対象とした書籍とその理由

分析対象は東日本大震災避難者の会 Thanks & Dream（編）（2017）『3.11 避難者の声～

当事者自身がアーカイブ『東日本大震災避難者の会 Thanks & Dream 発行の書籍である。この書籍に記述されている 55 の文章（同人物の複数投稿あり）を選んで研究対象とした。

本書は、いくつかの展示会で震災当時から現在までの避難者の思いや、今後いつどこで起こるかわからない大事故・大災害に備え、貴重な社会的教訓として活かされることを願って、避難者の「声」を展示した際の文章をまとめたもの。また、避難当事者自身が避難生活の現実、避難者の「今」、今だから伝えられる事などの真摯な思いが記述されている。

その他にも、避難者おすすめの映画【A2-B-C】、【小さき声のカノン】、【日本と原発】を観た人びとの感想、実際に裁判所に届けられた原告たち（避難当事者）の「避難の権利」を訴える意見陳述書、避難住宅打ち切り問題や、帰還政策の問題点など、当事者の目線・体験を通じての気づきを書いた手記・手紙、避難住宅問題、避難者いじめ問題、レポート・報告が記述されていた。

3.2 分析方法

これら被災による避難当事者の語りをテキスト化し、Text Mining Studio Ver. 5.1 (Mathematical System Inc.)により、テキストマイニングの手法を用いて内容語の分析を行った。体験に基づいた文章のデータは書籍の構成に従い、各語りを 1 行として入力した。

分析は、テキストの基本統計量、単語頻度解析、原文参照による分析、係り受け頻度解析、ことばネットワークの順に行った。なお、分析を行う際に出身地別、避難先、名前（またはペンネーム）、誰と避難したか、性別の属性に分けた。

3.3 倫理的配慮

すでに公表されている書籍の内容を用いた分析であるため、著作権に配慮する他は特に必要がない。

4. 結果と考察

4.1 基本情報

東日本大震災後における避難当事者が書いた文章の基本情報をみると、総行数は分析対象文章の総数を表しており、55 編であった。一人当たりの文章の文字数を表す平均行長は 739.8 文字。総文数は 2202 文で、平均文長は 18.5 文字であった。内容語の延べ単語数は 15803 個で、単語種別数 4394 個だった。タイプ・トークン比(type token ratio)は 0.278 と低く、文中に同じ単語が繰り返し出現する傾向があることが明らかになった。

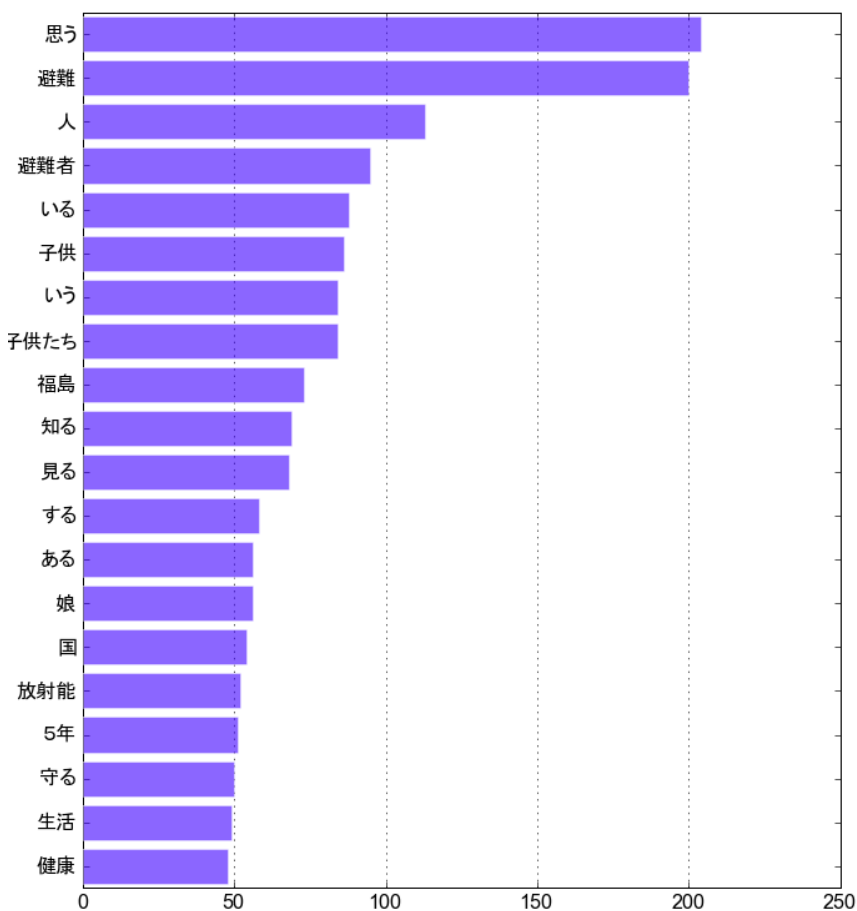
4.2 単語頻度解析

避難当事者の文章 55 編において、出現回数の多い上位 20 位の単語は表 1 の通りである。最も頻度が高かったのは「思う」であり、204 回出現していた。

続いて「避難」200 回、「人」113 回、「避難者」95 回、「いる」88 回、「子供」86 回、「いう」・「子供たち」ともに 84 回、「福島」73 回、「知る」69 回、「見る」68 回、「する」58 回、「ある」・「娘」ともに 56 回、「国」54 回、「放射能」52 回、「5 年」51 回、「守る」50 回、「生活」49 回、そして「健康」は 48 回であった。

「子供」「子供たち」を足すと 170 回と、上位 3 位に食い込むほど多く書かれている。さらに、「娘」（56 回中、18 才未満と判断できるもの）36 回も含めると、206 回となり、1 位となる。このことから、避難者の多くが子どものいる世帯であるということがいえるだろう。親が子どもの心身を気遣い、避難生活を選択したのである。

表 1 単語頻度解析 (回数)



4.3 重要な単語の原文参照

この中で着目したのは、「子供」「子供たち」、「福島」、「国」、「放射能」、「健康」である。以下、それらの単語を原文参照した。

(1) 子ども+子どもたち

子どもの健康被害に対する不安、子どもが生きやすい未来や体調などを考え、移住を決意している人が多い。子どもたちの命や健康を守りたいという意思が強い傾向にあるといえる。

しかし、子どものことを考え遠方への避難を決意したにも関わらず、周りの人々、ましてや身内にまでも、その決意に対する理解が少ないことも明らかになった。

その現状が特に赤裸々に綴られていたのは、森松明希子さんの語りである。中でも衝撃的だったのは、我が子に対して「鼻血が出てくれればいいのに」と書いてあったことだ。もちろん、自分の子どもの身体に支障が出ないほうがいいのに決まっている。彼女は子どもの未来を考え、大阪に母子避難しているが、目に見える変化がなければ、周りが避難することを認めてくれない・分かってもらえないという現状があるために、このような心情になってしまったのではないかと考えられる。

「子ども」を含む語りの一部を以下にあげる。

『私たち家族は、車を運転して、まずは東京に向かい知人宅に……行かなくても、持ち家があるのだから、誰も知り合いもないところへ行くのは大変だ、残れと言うのです。私たちは、とにかく子どもたちの健康が第一であると理解を求めたのですが、結局理解してもらえず、現在でも、このことが軋轢となっています。』

福島県南相馬市→兵庫県三木市 (家族避難) 木幡智恵子 女

『そして避難所を出て福島の幼稚園に入園させた3歳の息子やゼロ歳の赤ん坊に向かって私は鼻血を出せ、出してくれと言っていたのです。なぜなら、鼻血が出ればどれほど分かりやすいか……。我が子の鼻血を見たお母さんたちの多くが、すぐに荷物をまとめて避難をしていきました。何の迷いもなく避難という決断が出来るのです。躊躇なく避難するという選択が出来ます。母親として当然だと… 思います。ですから、私も我が子に鼻血の症状が出てくれないかと本気で思ったのです。』

福島県郡山市→大阪府大阪市 (母子避難) 森松明希子 女

(2) 福島

「福島」の出現回数は73回であった。避難者の語りに「福島」が入っているときには、「放射能」も多く登場していた。主に事実や現状を詳細に話すとき、福島に住んでいたことに

対する不安が述べられていた。特にその中でもいじめや、心ない一言などが目立っていた。福島から来たというだけで、災いを持ってきた天敵とみなし、差別やいじめの対象になってしまう。このような事態が起こってしまうのは、避難者に対する周囲の理解や放射能被害に対する正しい知識が明らかに不足しているためだと考えられる。避難者たちはこのような差別をきっかけに、さらに追いつめられてしまっているのである。

放射能の影響さえなくなれば、また故郷に帰り家族で暮らしたいという意見もある。避難者は複雑な心情を抱えているといえる。

「福島」を含む語りの一部を以下にあげる。

『運営に携わっていない理事長の父親から福島から来たような人がいたら生徒が増えない福島から放射能や災難を持ってきた等という差別発言を他の従業員もいるところで、何度も言われました。私は、このために、精神を病み、パニック、うつ状態となり、出勤できなくなり、退職することを余儀なくされました。その後、半年間心療内科に通院することとなりました。このとき受けた精神的苦痛は、トラウマになっており、今でも、私は、自分や子ども達、福島の人たちが差別的発言を受けるのではないかという不安に襲われることがあります。』

福島県いわき市→兵庫県姫路市 子どものみ→母子避難) 斎藤英子 女

『放射能の袋詰めとの共存など、およそ通常一般的な感覚を持ち合わせている母親が、普通の精神状態で冷静に考えて、受け入れられると、本気で世の中の人々は思っておられるのでしょうか？ もしも自分だったら、自分がわが子とともにこの現実を突き付けられたなら、あなたは黙ってこの放射能の袋詰めを目の前に暮らしを営もうと思えますか？ 復興がんばろう絆……。きれいな言葉で美談に仕立て上げるのはやめにしてください。これが、福島の現実です。

～中略～

遠く離れた土地に幼子と避難をしていたとしても、福島が、3. 1 1 前の何の健康被害のリスクも不安もない状態にもどりさえするのなら、すなわち、3. 1 1 前には現存しなかった放射線がなくなり3. 1 1 前の福島でありさえするのなら、今すぐにも家族揃って福島での生活をまた再開したいと心から願っているのです。』

福島県郡山市→大阪市 (母子避難) 森松明希子 女

(3) 国

「国」は54回、「日本」26回も入れると、80回出現した。国が原発に関して国民に対し十分な説明をしなかったことや、チェルノブイリとの対応の違いなどで対策への不満が多く書かれる傾向にあった。それは、「国が私たちのことを救助・援助してくれるはず」という期待を裏切られたことでこのような意見が増えたと思われる。このことから、「自分たち

に一体なにが起こったのかを知りたい」という気持ちと、必要な情報を提示しない国に対して不信感を持っているといえる。また、自分たちだけ逃げた罪悪感から、より多くの人たちに放射能の実状を知らせてほしいという心情もあるのではないだろうか。

避難区域が一方的に解除されたことにより、避難者が避難する大きな理由を失ってしまったことが国への不信感と絶望感をより高めたと思われる。

「国」については以下のように語られていた。

『母子避難で大変なのは、夫が大阪に来る時の交通費です。その他、二重生活のために経済的負担はとても大きいです。東京電力に請求しても、相馬市は国が定める強制避難区域ではないために、認めてもらえません。このままでは、避難を続けることができない……でも、相馬市に帰るのも不安 私は、他の避難者達と一緒に裁判を起こす決意をしました。』

福島県相馬市→大阪府守口市 (母子避難) O. N 女

『今、国は、熱心に福島に帰るよう帰還を促しています。以前より線量が下がったとか、除染が進んだなどと説明していますが、そんなことでは済まない話です。問題なのはそこに放射性物質があるかどうかなのです。本来、決して外に出てはいけなはずのものが、ほんの少しでも外に出てしまったことが大問題であり、今後それらは半永久的に消えることはありません。量が減ったから大丈夫などと… … ショック症状が出たら一体どうするのでしょうか？ 全ては自己責任になってしまいます。そのような状況で帰還しろということは、蕎麦アレルギーの人に蕎麦を食べろ！… と言っているのと同じことです。もし私が子どもにそんなことをしたら、それは虐待にあたるのではないかとさえ思います。放射性物質アレルギーの人に対して福島に帰還しろ！などというショック症状を引き起こすような呼び掛けは、もういい加減やめにしませんか？アナフィラキシーキャンペーンを推し進めることは罪を犯すこととなんらかわりありません。』

福島県→大阪府 (母子避難) A. H 女

(4) 放射能

「放射能」は52回用いられた。避難者の生活を一変させた元凶ということもあり、放射能を「巨大すぎて敵わない敵」のように語っている人もいる。健康に害を及ぼし続ける、その目に見えない恐怖を感じている家庭が多かった。特に子どもがいる家庭は、子どもたちを放射能から守ろうとするため敏感になっている傾向にある。このことから、避難者にとって「放射能」とは自分たちの生活を一変させたどうすることもできない脅威であり、避難した先でも、「そのうち影響が出るかもしれない」と過去に受けた被ばく線量の影にまだまだ苦しめられている。

「放射能」については以下のように語られていた。

『3. 1 1そして原発事故直後から私たちは何ひとつ変わってはいない。変わったことといえば、世間から忘れ去られようとしているくらいでしょうか。私は今母子避難、一家離散、子どもの健康被害に対する不安……。何一つ変わってはいない。真実は公表されないということも。ただただ悲しい、情けない……。事実をしっかりと見てはもらえない。そこには誰にも消せない放射能という汚染がある。事実がある。首にメスを入れられた子どもたちを直視して欲しい。それが事実……。消しようがない事実です……。』

福島県→大阪府 (母子避難) ひがしだあさみ 女

『放射能の汚染がなければ埼玉で暮らしていたのに……。健康面での不安はずっと続きます。大阪で暮らしていても食べ物には気を付けています。これからも気を付けていかななくてはなりません。これは普通のことじゃないです。でも、気を付けるのが当たり前にならないと子供の健康を守ることはできません。安心して食べられる日はくるのでしょうか。少しでも子供が生きやすい未来になるよう願わずにはいられません。』 埼玉県→大阪府 (家族移住) C 女

(5) 健康

「健康」は48回出現した。避難して良かったと感じている人もいる一方で、健康を維持するために避難したものの、生活が一変したストレスにより逆に体調を崩してしまった人もいた。避難者たちは、放射能とはまた違った目に見えない敵と戦わざるを得ない現状に置かれている。

「健康」については以下のように語られていた。

『身体と心が健康なら、どんなことも頑張れる。自分の生きたいように生きていって気付いたら、きっと素晴らしい人生を自分で切り開いていくことが出来る人になると、信じています。思い切って関西に来て、本当に良かったと実感する日々です。』

神奈川県横浜市→奈良県奈良市 (母子避難) すどうあいこ 女

『私は自分の健康を守るため、クラスで誰よりも先に決まっていた就職先も入社式前日に辞めました。原発事故によってふるさとを奪われ、どれだけ生まれ育った場所が大事だったかということがわかりました。私は避難してきて病気になり、避難しなかったほうが良かったのではないかと悩むことが多々あります。』

福島県→兵庫県 (家族避難) 匿名 女

じめ、生活環境の変化によるストレス、故郷への複雑な思いなど、様々な状況が避難者を追いつめてしまっていることも判明した。

原発に関しては、必要な情報を提示しない国への不信感や、チェルノブイリとの対応の違いなどでその対策への不満が多く書かれる傾向にあった。また、避難区域が一方向的に解除されたことにより、避難者が避難する大きな理由を失ってしまったことが、国への不信感と絶望感をより一層高めたのだと思われる。

避難者にとって「放射能」は、自分たちの生活を一変させた脅威であり、その脅威から逃れるために避難した先でも、今もなお様々なかたちで苦しめられ続ける存在である。ことばネットワークでは「思う」が最も他の話題に多く関わっていたことから、避難者が震災後の被ばくによる健康被害や、今後の生活面などに悩んでいることに加えて、避難先での人間関係など、新たな悩みが生まれていることが原因だと推測できるだろう。

5.2 本研究でわかった母子避難家族の母親の心情

本研究では、緊急事態に陥った時、母親はどのような感情・行動をとったのかを分析した。この書籍を読んで何よりも驚いたのは、母親の不条理に対するむき出しの敵意だった。ここまで赤裸々に本音を書いている文章は貴重だと感じたからである。国が対処してくれない・対応してくれなかったことへの恨みは、特に強く感じとれた。ここまでの生々しい表現、感情をむき出しにしている本に触れたのは筆者にとって初めてであり、大きな衝撃を受けた。そして、その激しい感情は別の観点から見ると、これこそが「無償の愛」だとも感じ取ることができた。「子どもたちを放射能から守りたい」という内容が多くの文章に共通していたことから分かることは、母親は緊急事態に陥ると、自分が今まで築き上げたものさえ投げ出して、子どもを守ることを第一優先とする傾向があるといえるだろう。これは、圧倒的に母子避難が多いことから証明できるのではないだろうか。あらゆる感情の中で何よりも強く働いたのは子どもを思う母親の愛情だと思われる。この「母親の愛情」こそが、避難者の語りの分析で、最も重要なカギであったといえるだろう。また、この書籍の発行日をあえて3月11日としているところからも自分たちの生活を一変させた原発事故に対する強い感情を感じる。

5.3 子どもの作文と対比した本研究対象の母親の語りの特徴

飯島および Ito & Iijima(2013) は、3.11 における子どもたちの作文について分析した。その結果を踏まえて、いとう(2014)は、子どもの願望を分析し、特に原発事故の体験者は、家族や友人などの人間関係や、学校や遊び場などの場所についての現状に大きく不満足があることを示した。本研究の対象である母親の心情は、子どもの生活と健康と未来、そして社会的におかれている立場に対する不満と抗議が強く現れていた。

6. おわりに：筆者の個人的体験より

筆者も、地震直後のわずか 3 週間ではあったが避難当事者であった。当時の状況を思い出してみる。小学 5 年生だった筆者は、母に連れられ 2011 年 3 月 14 日 母の実家がある鹿児島県へと避難した。羽田空港に着くと、母子連れが大勢いたのを覚えている。

震災直後から母はあらゆる情報を集め、放射性物質を身体に取りこまないよう、登校時以外は外出禁止。外出時にはマスクをし、ビニールのレインコートを羽織らされ、根昆布水を飲まされた。当時の母の口癖は「自分たち(父と母)だけならいいの。でも、あなたはこれからの人だから、子どもも生まなきゃいけない……ことの重大さがわかっていたのに、あの時、なんでしなかったのだろうと後悔することだけはしたくないから…私があなたにしてあげられることはすべてやる」。筆者が疑問を感じる前に、幼い子でも分かるように放射性物質の怖さを何度も何度も教えてくれたため、避難生活を送ることに対して一切、不安・不満はなかった。その頃、たまたま自宅のトイレには「放射性物質」「半減期」などと書かれた元素記号のポスターが貼ってありトイレに入るたびに見ていたので、母の言うことを子どもながらになんとなく理解していた。また、何の抵抗もなく受け入れてくれた鹿児島の祖父母のおかげで、避難先でもストレスのない日常を過ごすことができたことも幸運だったといえるだろう。

新年度が始まり、帰宅して学校に行くと「なんでずっと休んでたの」「なんでいつもマスクしてるの」などと聞かれたが、なんとなく本当のことを言うてはいけないのではないかと(後ろめたさを感じ、ごまかしていた。母も本当に親しい(理解してくれる)友人以外には、一時的に避難したことを内緒にしていたようである。いま思えば、我が家にとって鹿児島行きはとても大きな決断だったのだと思う。父をひとり東京に残し、周囲の人々が計画停電などの不便な生活を強いられている中で、自分たちだけ逃げることへの罪悪感(引け目・後ろめたさ)や、みんなは普通にしているのに気になってしまう自分は神経質なのだろうかという自責の念が大きいのじかかり、思い立ってから出発を決断するまで、母は何度もパニック状態に陥り、考えが二転三転していたそうである。そんな中、たまたま同じクラスに同じように四国へと避難を決めた家族がいたので、その母親と学校への連絡等で連携することが出来たことが背中を押してくれたのだそうだ。

春休みを間近に控えていたこと、義務教育期間であったことも大きかったと思われる。高専生の今、もし同じ状況になったとしたら… 同じような決断が出来たかといえば、きっと不可能だったのではないだろうか。そのことから考えてみても、長期間避難生活を送っている家族の苦悩は計り知れない。

復興庁によると、2018 年 2 月 13 日時点の避難者等の数は約 7 万 3 千人となっており、避難は長期化している。避難者たちは震災から 7 年経過した現在もなお、様々な状況に苦し

み続けているのである。長期間避難者の思いや苦悩が大勢の人々に理解されるときが少しでも早く来ることを心から願っている。

7. 謝辞

学生研究奨励賞の原稿作成にあたり、Text Mining Studio を使用させていただきました数理システム様に感謝いたします。本研究に使用させて頂いたアーカイブの著者の皆さんに感謝いたします。また、ご多忙の中、ていねいにご指導いただいた和光大学のいとうたけひこ先生に心より感謝いたします。また、ていねいに原稿を見ていただいた阿部恵子さんに感謝いたします。

8. 文献

服部兼敏 (2010). テキストマイニングで広がる看護の世界 : Text Mining Studio を使いこなす. ナカニシヤ出版

飯島 有紀恵 (2012). 3 1 1 震災における子どもたちの語り : 作文における被災者の声のテキストマイニング. 2012 度 VMStudio & TMStudio 学生研究奨励賞 結果発表 <https://www.msi.co.jp/tmstudio/stu12result.html>

いとうたけひこ (2012). 東日本大震災についての語り 尾崎真奈美 (編) ポジティブ心理学再考 ナカニシヤ出版 Pp. 1-9.

いとうたけひこ (2014). 津波と原発の子どもたちの時間的展望への影響: 東日本大震災後の作文のテキストマイニング 第 37 回生命情報科学会 (ISLIS) 学術大会 2014 年 3 月 15-16 日 東邦大学

Ito, T., & Iijima, Y. (2013). Posttraumatic growth in essays by children affected by the March 11 Earthquake Disaster in Japan: A text mining study. *Journal of International Society of Life Information Science*, 31(1), 67-72.

西野美佐子・いとうたけひこ (2013). 東日本震災を体験した大学生の文章のテキストマイニング : 基本的自尊感情 (共感的自己肯定感) と心的外傷後成長 (PTG) に焦点を当てて 東北福祉大学大学院紀要, 10, 45-63.